

『鉄輪』の夫

小田 幸子

《鉄輪》では、祈禱台の作り物を出す。

柱の四隅に五色の幣を立て、上段の棚には侍烏帽子と鬘を置き、下段には幣を載せる。本文によると、陰陽師安倍清明

(ワキ)は、命を転じ変えるために「茅の人形を人尺に作り、夫婦の名字を内に籠め」る。烏帽子と鬘は、この「等身大に作った男女二体の藁人形」に対応している。後シテは、「後妻の、髪を手に絡まいて」の箇所、鬘を左手にからめて持ち、打杖で何度も打ってから、放り投げる。激しい嫉妬心が爆発する「後妻打」がリアルに表現されており、一曲中の見所になっている。

棚に置く品物は、昔から固定していたわけではない。室町末期から江戸前期頃には、観世流では幣だけ、他の流派では幣と鬘という差があり、多くの型付が言及するところである。たとえば、観世流

の『宗節仕舞付』では、「かなわの作物：御へいを置候て出候。のつと過て、又たなのうへに御へいをおき候。よの物はいらず候」とわざわざ断っている。この場合、後妻打は、幣の紙を手に巻いて行なう。

烏帽子・鬘の両方を出す最古の記事は、今のところ、江戸初期頃と推定されている福王流の『能作物図』であるが、同時期の他の資料には烏帽子への言及がない。当時は出さない方が普通だったと思われる。観世流で現行と同形なのは、観世元章関係の作り物付が最も古い。

以上の変化は、より実感的でリアルな印象を与える方向へと演出が動いていたことを示すだろう。ただ、各流とも昔は烏帽子を置かなかつた点に関しては、別の理由があるかもしれない。というのは、夫(ワキツレ)が退場せずに、後場にも残っていたのではないかと思わせる

記述が、『宗節仕舞付』にみえるからである。関連部分を次に抄出しよう。

①、「ふしたる男の」と云時、つくり物のそばへより、下にゐて、作物の右の方を見て「うらめしや」と云出し、

②、「いんぐハ」といふ時、立あがりざまにそのあしにて左へまハリ、おつとのかたを見、

③、「ふしたる枕に立より」と云時男のそばへより、

3例とも、シテが夫に立ち向かっていく箇所である。①は、夫が作り物の右の方にいると想定しているようだが、これだけでは人物が実際に居るかどうかわからない。一方、②③は傍線のように「夫の方」ないしは「男のそば」と明記している。方向としては①と同じであるが、もし、ワキツレが退場してしまっていたのであれば、このような記述のしかたをするであろうか。そして、夫が居るから烏帽子を置かないのではないだろうか。

残念なことに、この推測を裏付けるに足る資料はみつからなかつた。『宗節仕舞付』の記事は、「ワキツレが居るよう

にも受け取れる」という程度のものでしかない。また、台本の文句から判断するのも難しい。そこで以下は、ワキツレが退場しなかった可能性がどの程度あるのか、別の面から考えてみたい。

ワキツレの動きがわかる最古の型付たる寛永期の『観世流仕舞付』以降、ワキとの応対後ワキツレは退場する形である。シテは形代を夫だと思っているはずだから、本人がいる必要はない。もちろんセリフもないから、ここで退場するのは自然な流れである。しかし、逆の見方をすれば、もとは残っていたのを止めてしまうのも容易だったことになろう。同書ではワキが祈祷後に退場する演出があると言い（現在は残る）、その方が良くとコメントを加えている。内容上はともかく、ワキも後シテと直接交渉を持たないので、演技上は退場しても問題ないからだろう。ワキツレの退場にも同様な事情を想定し得るのではあるまいか。

嫉妬のため鬼形となった女が後妻打に及び、取り殺そうとすること、祈祷師が呼ばれて阻止することなど、〈鉄輪〉は、

先行曲〈葵上〉を参照しているとと思われるが、〈葵上〉と異なる面もいくつかある。その中で注目されるのは、〈鉄輪〉のシテは、後妻以上に夫に対して強い恨みと復讐心を抱いている点である。前シテ登場段では、不実な男に契りをこめた悔しさを述べ、後場では、まず夫の枕元に寄り添って長々と恨み事を言う。後妻打を果たした後は、「ことさら恨めしき、あだし男を取って行」こうとするが、三十番神に責められ、「腹立ちや思ふ夫をば取らで」と悔しがる。本命はあくまで夫なのである。

また、「今夜のうちにおん命も危ふ」いのは夫であり、夢見が悪く不安を抱いているのも夫である。妻を取り殺そうとする〈葵上〉のシテに対して、夫を取り殺そうとするのが〈鉄輪〉のシテという対比が読み取れるだろう。

現在の演出は、シテの復讐は演技上もつばら後妻の方に向かっている。〈葵上〉への連想も働いて、復讐の主体が妻にあると見えてしまい勝ちではないだろうか。夫が残っていれば、より台本に即した舞

台となろう。重要な役にしては、ほんの一場面しかワキツレの出番がないというのも不自然といえはばいなくもない。〈葵上〉では、責められる葵上を小袖で表現している。女を鬘で示すとすれば、夫を示す品も出すのが自然なはずで、烏帽子を置かなかつた古演出の場合、ワキツレが残っていないのであれば、復讐の主要対象が全く舞台上に無いことになってしまふ。

先に触れたように、室町期から江戸前期の〈鉄輪〉の演出は、流動的であった。現行と異なる点を替工も含めてあげれば、前シテは笠をかぶらない（『能出立之次第』）、数珠を持つ（『盛勝本衣裳付』）、後シテは打杖を持たない（『宗節仕舞付』）などがある。また、鬼女の能の中では、面・仮髪・扮装の、時代や流派による異同の幅が最も大きい（拙稿「鬼女出立の変遷」参照）。

夫が最後まで舞台に残る演出があったとしても、決しておかしくないとだけは言えそうである。

（聖徳大学助教授）